

煙草入れと煙管

松田 猛*

Tobacco container and pipe holder

Takeshi Matsuda

I

煙草の起源については未解明であるが、メキシコ中部からコスタリカ西部にかけてのメソアメリカ古代文明圏、オルメカ、テオティワカン、マヤ、アステカなどの古代都市で広く利用され、7世紀後半の年代が与えられている。煙草は雨を呼び豊穡をもたらす儀式用の植物として、あるいは古いや病気の治療にも利用されながら、徐々に嗜好品としても広まった(半田 1996)。

そして、15世紀にアメリカ大陸からヨーロッパに、日本へは南蛮貿易により16世紀末に伝えられた(渡辺 2007)。北海道にもほぼ同時期に伝播したとみられ、上ノ国町勝山館跡(15～16世紀)から煙管が出土している(松崎 2001)。また、平取町イルエカシ遺跡では1667年降下の樽前b火山灰層の下から多くの煙管が出土し、普及していたことが知られている(鶴丸 1989)。さらに、成人女性が埋葬されていた墓に煙管が副葬されており、喫煙習慣が伝えられてから一定の年代を経たことが指摘されている(渡辺 1996)。

一方、考古学的遺物、石製雁首の存在や、ベーリング海沿岸、アメリカ北西海岸のキセル交換儀礼とほぼ同じ様式の習俗がアイヌ社会にも成立していることから、北方ルートで早くから喫煙の習俗が存在し、日常生活のなかに定着するのは和人社会よりも早かったという見方もある(大塚 1993)。

文献記録では、1643年、フリースの航海日誌により北海道の東部まで伝わり利用されていたことが確認でき、その後大陸から樺太経由や千島経由のルートもあったという(馬場 1942)。フリースの航海日誌、トカチのアイヌ人のところでは「本船にのぼるとタンバコと言って煙草を求めたが、他の言葉はわからなかった。彼らは塩を使っていない燻製の鮭と、鹿の皮一枚を司令官に贈ったが、アラック酒と煙草でもてなされて、たいへん喜んだ。」、歯舞諸島のアイヌ人では「その時三隻の小さい舟が本船に接舷してきた。……そして船上に上り、直ちにタバコをくれと言った。」、また樺太のアニワ湾のアイヌ人では「……刻み煙草、そしてたくさんの毛皮のあるのを見た。」と記録されている(北構 1983)。

喫煙は煙管を用いる方法で、現在多く普及している紙巻煙草とは異なる。17世紀には嗜好品として普及した

が、煙草の交易量が少なかったためイタドリ・ブドウ・ヨモギなどの香りの良い植物の葉などを乾燥して細かく刻み喫煙していた(林 1970)。また、18世紀には松前・上ノ国など北海道南部を中心に煙草の栽培が行われ、江戸時代末期には勇払・様似まで広がっていた(渡辺 1996)。

タバコの語源についてはいくつかの説があるが、アメリカ大陸からヨーロッパに伝えられる過程で定着していったようであり、日本でもタバコと呼ばれている。アイヌ語では、タンバクという。「日本語のタバコがアイヌでわ「タンバク」と語尾が「ク」になったのわ、単なる音韻変化でなく、「のむ」という意味に引かれた民衆語原解の結果である。」(知里 1940)という。煙草入れはタンバクオプ、煙管はキセリあるいはセレンポと呼んでいる。釧路の春採では、たばこ tapako という語が採録されている(吉田 1989)。

釧路市立博物館には煙草入れが8点、煙管が4点収蔵・展示されている。これらの喫煙具について紹介したい。アイヌの喫煙具が図化・報告されている例は少ない。アイヌ芸術 第二巻 木工篇(杉山 1942)やアイヌの民具(萱野 1978)、美幌町博物館収蔵目録第1集(美幌町博物館 1989)、アイヌ民族の煙草容器分析(戸部 1999)など限られた資料の中で数点しか確認できない。アイヌ民族資料は、その多くが近代以降の所産とみられるが、考古学資料との関連性を考える上でも図化されることが望ましい。

アイヌの喫煙具は、印籠形の煙草入れ・煙管差・煙管などで構成される。煙管は火皿・雁首・羅宇・吸口からなり、火皿に刻み煙草をつめて火をつけ煙を吸う道具である。1～8が煙草入れで、1～5・7には煙管差、8には煙管入れが付いている。8はニブフによるが、合わせて整理した。9～12は煙管である。煙草入れ・煙管差・煙管が組み合わされた資料は残されていなかった。

2・4・6～11は、1979年に『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(有形民俗文化財3)』(北海道教育委員会)の中で「釧路市立博物館所蔵品目録」として報告されている。作図を含めた調査は、1983年に藤村久和氏、高橋規氏の指導・協力を得て実施したが、未実測の部分は加えた。実測・トレースは、山岸隆弘氏や村尾つぐみ氏の協力も得ている。

*釧路市埋蔵文化財調査センター 元職員

II

1の煙草入れは、イタヤカエデ材で作られ、幅10.2cm・奥行き6.7cm・高さ6.7cmの大きさである。鋸を用いて形を整え、小刀で中をくり抜き、蓋を別に作って合わせている。本体内部の底近くは焼いて木質を除去している。蓋と本体を合わせた全体形は、胴部がくびれた形であり、上から見ると六角形で、両側に本体と蓋を綴り合わせる紐を通す径0.4cmの孔が開けられている。本体の内部はほぼ長方形で、4.4×3.5cm・深さ4.8cmである。本体や蓋の側縁部近く（スクリーントーン部分）を縦方向に削り窪ませており、一部で削り過ぎて貫通している。蓋の中央部には山形の刻み目が二つ、側縁部には菱形の刻みがあり、本体の中央部には削り残しにより山形、側縁部にはV字状の文様が作出されている。底面には綴り合わせる紐を埋めるため？の直線の刻みと長方形の刻みや未貫通の穴があり、いずれも後日の作である。

煙管差もイタヤカエデ材が用いられ、長さ30.4cm・幅3.5cm・厚さ1.6cmである。基部から約7cmは幅2.2cmとやや細くなっており、幅の変化する部分に径0.4cmの孔が穿たれている。煙草入れと結ぶ紐を通す孔であり、煙草入れとは木綿糸の紐で結ばれている。他に先端部近くに径0.3cmの孔が二つと貫通していない径0.5cmの穴が一つある。前者は吊り下げる紐が付けられていた。後日の作であろう。表面の基部付近に印、幅の変化する部分から先端部の間はすじ彫りで埋められた杏仁形文と小さな菱形文が彫刻されており、最も先端部の杏仁形文の内側は楕円形に浅く削られている。側面は先端部が緩やかに反っている。裏面にはヤニを取る用具入れがある。長さ16.2cm・幅1.4cm・深さ0.7cmである。蓋は先端部方向に引き抜く仕様で、長さ18.2cm・幅2.1cm・厚さ0.4cmで、引き抜き差し込むための窪みが前後に各々1ヶ所設けられている。

昭和11年、釧路市の吉田為造氏によって収集されている。煙管差の印から旭川地方が製作地とみられる。

2の煙草入れは、幅11.6cm・奥行き7.5cm・高さ10.1cmの大きさである。本体はサクラ材？の中をくり抜き貫通させ、蓋と底板を別々に作って合わせている。正面形は四角形、上から見ると六角形で、両側に本体と蓋を綴り合わせる紐を通す径0.6cmの孔が開けられている。内部はほぼ長方形で、6.4×5.2cm・深さ8.4cmである。本体と蓋の一部にサクラの皮が貼ってあったが、ほとんど剥脱している。本体・蓋ともに少々削り低くした部分に、幅0.8～1.4cmの帯状に、本体は上下に各一列の計二列、蓋は一列貼られていた（スクリーントーン部分）。本体側の蓋と合わせる凸部にもサクラの皮が張ってあった。蓋もサクラ材？とみられ、底板はイタヤカエデ材で、底面に印とみられる長さ4.7cmの直線が1.2～1.3cmの間隔で3本刻まれていた。底板は別人の作とみられ後日の挿入である。

煙管差はイタヤカエデ材で作られ、長さ23.5cm・幅3.7cm・厚さ1.2cmである。細長い筒状で、両端部の約7cmが上面を削られ厚さ0.8cmと薄くなっており、先端部は斜めに削られ丸みのある造りになっている。先端部から5.0cmのところ径0.5cmの孔、基部から5.3cmに径0.9cmの孔が開けられている。前者は吊り下げる木綿糸の紐が付けられ、後者は木綿糸の紐で煙草入れと結び合わされている。側面の先端部は緩やかに反っている。

大正15年頃、佐藤直太郎氏が釧路市で収集した。

3の煙草入れは、幅11.7cm・奥行き9.1cm・高さ7.4cmで、胴部がくびれた作りとなっており、中央部はさらに削られ一段低くなっている。上から見た形は丸みのある菱形である。本体はナラ材の中をくり抜き貫通させ、蓋と底をイタヤカエデ材で作って合わせている。接着に松脂が用いられている。本体と蓋を綴り合わせるために径0.5cmの孔が両側の縦方向に開けられている。内部はほぼ楕円形で、径5.5×4.1cm・深さ7.4cmである。本体の中央部付近のほぼ2.6cm四方は節穴？のためか、共木のナラ材で埋め木されている（スクリーントーン部分）。本体・蓋ともうろこ彫りで充填された8個の括弧文が連続して巡らされている。本体は上下に二列、蓋は一列である。蓋の上面はうろこ彫りとすじ彫りで充填された括弧文やうろこ彫りで充填された杏仁形文が彫刻されている。

煙管差はイタヤカエデ材が用いられ、長さ32.5cm・幅5.0cm・厚さ0.9cmの細長い筒状である。基部の幅は3.0cm、先端部に向かって徐々に幅広くなり、先端で5.0cmを計る。先端部から4.8cmに煙管の雁首を収める径1.3cmの孔、基部から5.2cmに煙草入れと結び合わせる径0.3cmの孔が二個開けられている。煙管差もうろこ彫りやすじ彫りで充填された括弧文が施されている。側面の先端部はわずかに反っている。裏面は煙管収める部分が少々窪んでいる。煙草入れと煙管差及びガラス製青玉の緒締めはイラクサの紐で結ばれている。ガラス製青玉の大きさは径2.3×2.0cmである。

昭和13年、片岡新助氏が釧路市で収集した。

4の煙草入れは、幅9.4cm・奥行き8.0cm・高さ6.2cmの大きさで、胴部が少々くびれ中央部はさらに削られ一段低くなっている。上から見た形は丸みのある菱形である。本体はナラ材の中をくり抜き貫通させ、蓋と底板を別々に作って合わせている。蓋はナラ材、底板はイタヤカエデ材である。内部はほぼ楕円形で、径5.4×3.9cm・深さ6.2cmである。本体と蓋は両側に径0.5cmの孔を穿ち綴り合わせている。本体の一段低くした側縁部近くは縦方向にさらに削り窪ませている（スクリーントーン部分）。本体と蓋の側面に二重・三重の円形文や目の文及び斜格子目文など、蓋の上面には8弁の花弁文が刻まれている。

煙管差はナラ材？が用いられ、長さ29.1cm・幅3.8cm・厚さ1.3cmである。渦巻文や斜格子目文などが彫刻され、

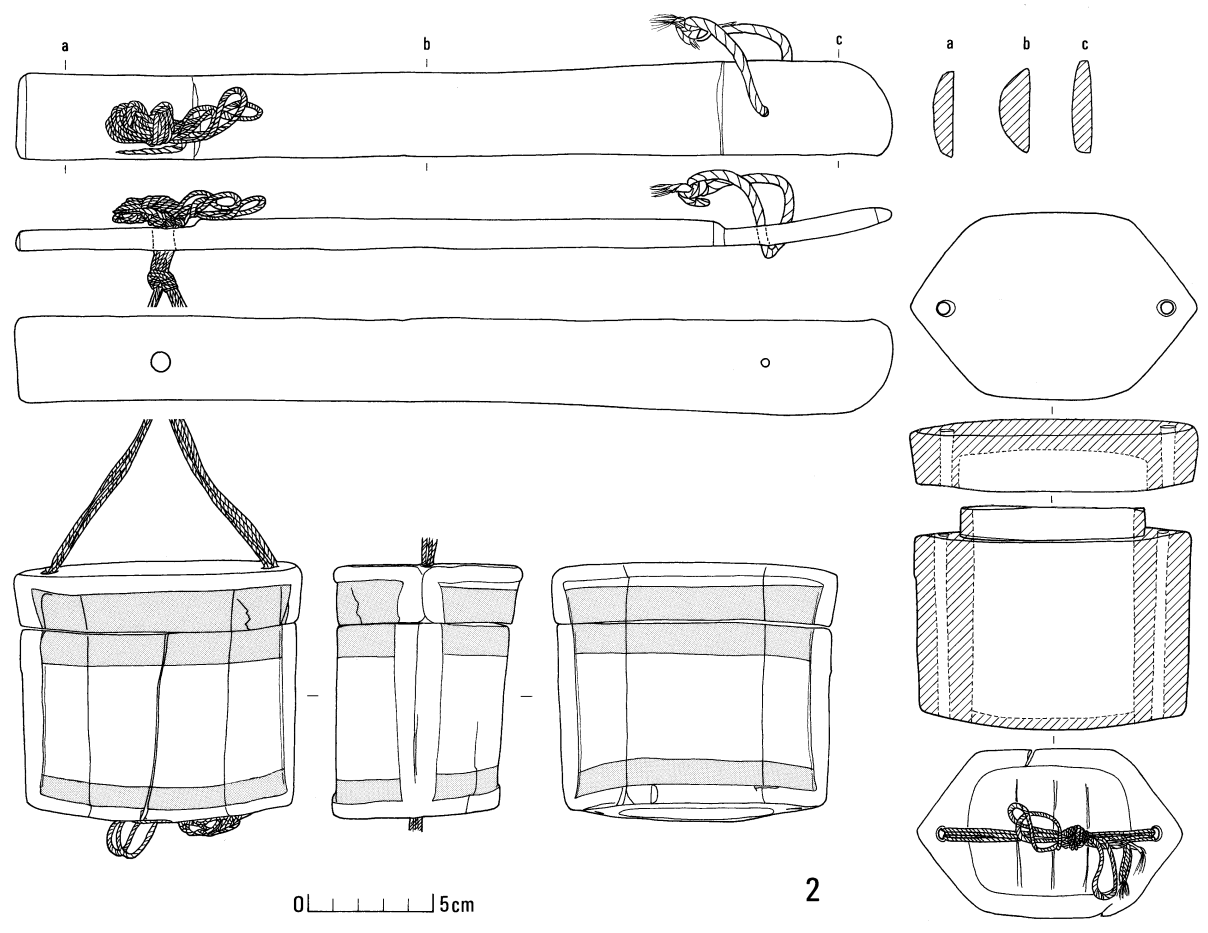
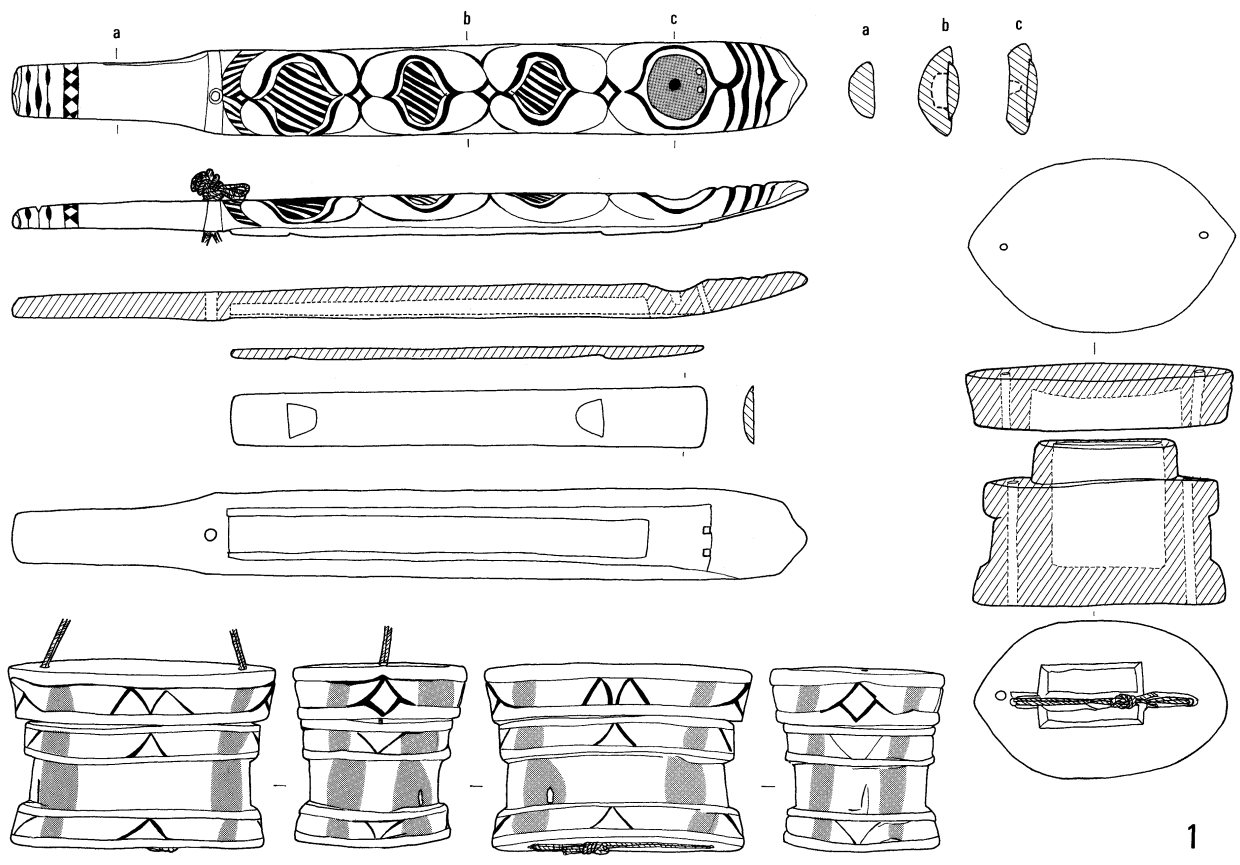


图1 烟草入れ1、2

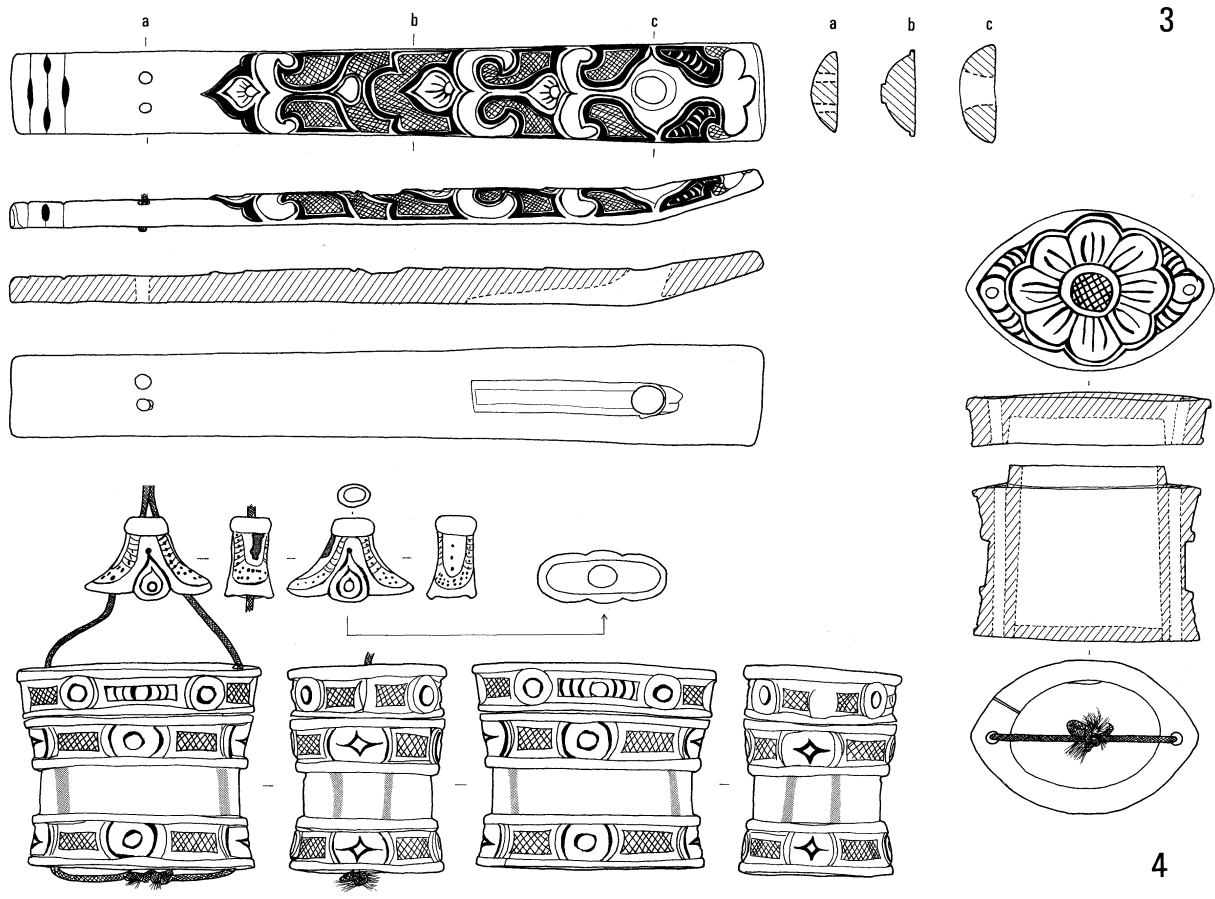
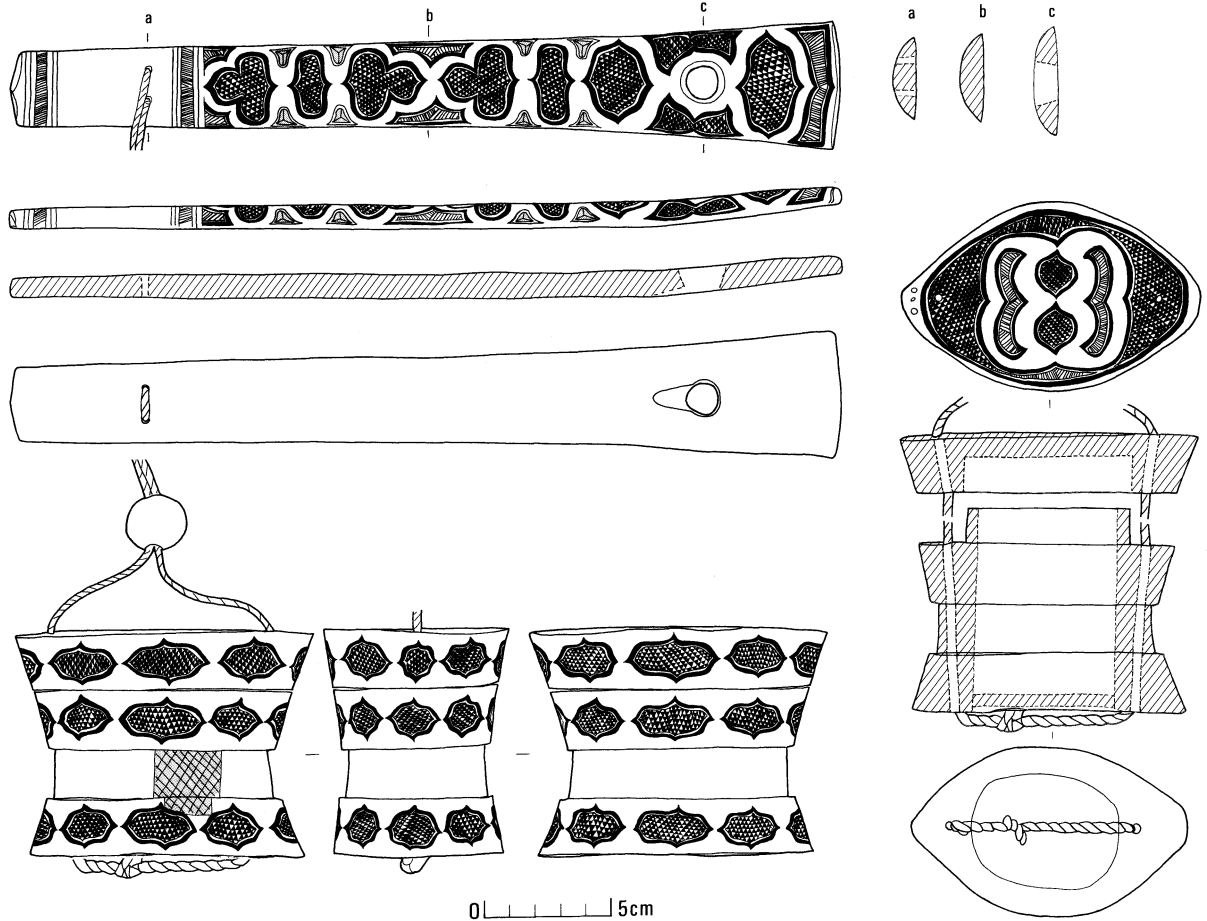


図2 煙草入れ3、4

基部付近に印が刻まれている。先端近くに煙管の雁首を収める径1.2×1.0 cmの孔、基部付近に煙草入れと結び合わせる径0.4 cmの二つの孔が開けられている。側面の先端部は反っている。裏面には雁首を収める孔の付近に長さ5.8 cm・幅1.2 cm・深さ0.3～0.7 cmの溝がある。この部分はヤニ落としの用具を入れるところであるが、用途を満たす造りになっていない。単に煙管の収まりを良くするための溝とも思われないが。

緒締めは彫刻文のある鹿角分岐部が用いられ、煙草入れ・煙管差とは絹糸の紐で結ばれている。彫刻文は中央部にしずく形の刻みの中に孔が穿たれ、側面から見てU字状に囲まれた中に刺突文などが施されている。

本体・緒締め・煙管差は別人の作であるとみていたが、『アイヌ芸術』木工篇図版46-2に煙草入れ・煙管差しの彫刻文、緒締めなど類似した資料が紹介されている。日高地方、比較的古式のものという(杉山 1942)。本体の底板は別人の作とみられ後日の挿入である。

昭和18年、釧路市城山町の田中造次氏より片岡新助氏を経て収集された資料である。

5の煙草入れは、幅9.4 cm・奥行き6.7 cm・高さ8.3 cm、センノキ材の中をくり抜き貫通させ、蓋と底板はイタヤカエデ材で作って合わせている。蓋と本体の合わせは、1～4と異なり蓋が凸状である。正面形はほぼ四角形であるが本体の胴部が一段低く削られ、蓋と底部がやや張り出す。上から見ると六角形で、本体と蓋を綴り合わせるために径0.6 cmの孔が両側の縦方向に穿たれている。底板は4ヶ所に径0.5×0.4 cmの大きさの木釘の頭部が観察され、本体と合わせるため斜めに打ち込んでみるとみられる。内部はほぼ長方形で、5.5×4.7 cm・深さ6.4 cmである。本体は括弧文状の曲線文やうろこ彫り・すじ彫りで充填された曲線文、そして底部付近は2～3段のうろこ彫りが巡る。蓋の側面は括弧文、上面は枝葉文が施されている。

煙管差はイタヤカエデ材で作られ、長さ42.6 cm・幅4.1 cm・厚さ1.3 cmである。基部より5.5 cmのところまで幅2.4 cmと細く、4.4 cmに煙草入れと紐で結び合わせるための径0.5 cmの孔がある。また、先端部から5.5 cmに煙管の雁首を収める径1.4 cmの孔が穿たれている。煙管差の表面はうろこ彫りやすじ彫りで充填された渦巻状の文様が刻まれている。側面の先端部は緩やかに反っている。煙管差の裏面にはヤニを取る用具入れがある。長さ26.2 cm・幅2.0 cm・深さ0.8 cmである。蓋は失われている。

昭和14年、片岡新助氏が釧路市で収集した。煙草入れと煙管差は彫刻文様に類似しているところもあるが、刻みの磨耗程度が異なり、製作された時期や製作した人が違うのであろう。収集月日も異なり、後日合わせたとみられる。製作地は旭川地方であろう。

6の煙草入れは、幅7.1・奥行き4.7 cm・高さ9.8 cmである。サクラ材の上に真鍮製板を貼った作りとなっ

おり、中に刻み煙草が入っている。真鍮製の板は、本体の表裏面に各々4箇所計8箇所、蓋の表裏面に各々2箇所計4箇所、合わせて12箇所にほぼ1.7×1.3 cmの四角い窓が開けられ、窓の部分に桜の皮が貼られている(スクリーントーン部分)。正面形は蓋の上部がやや膨らむがほぼ長方形で、上から見た形は楕円形である。本体の内部は5.7×3.9 cm・深さ6.8 cmである。根付としてガラス製黒玉2個が木綿糸で結ばれている。玉の大きさは径2.6×2.3 cmと径1.7×1.6 cmである。

この煙草入れは佐藤直太郎氏が釧路市で昭和15年頃収集し、根付のガラス製黒玉は大正5年に釧路市米町の古物商から入手されている。従って、ガラス製黒玉2個は木綿糸も含め後日加えられたようである。和人使用の煙草入れとみられ、地元の人に残されたのであろう。

7の煙草入れは、クマの上顎骨を用いており、牙の先端部は平坦に削られている。幅9.1 cm・奥行き5.9 cm・高さ8.8 cmである。下地にとのこを塗り、外側は黒漆、内側は赤漆が塗られている。蓋はセンノキ材を用い、上顎骨の切断面に合せた形で、ハート形に近い。幅9.1 cm・奥行き5.3 cm・厚さ1.4 cmである。左右端から約1.5 cmに、本体と蓋を結ぶ紐を通すために径0.3 cmの孔が開けられている。蓋と本体の合わせは5と同様、蓋が凸状である。

煙管差は鯛の形を模した魚形で、カツラ材が用いられている。長さ12.7 cm・幅7.5 cm・厚さ2.0 cmである。ほぼ中央部に煙管の雁首を収める径1.3 cmの孔が穿たれている。表裏面とも青海波文や弧線の連続文が彫刻されている。緒締めは菱の実の殻が用いられている。

昭和23年、片岡新助氏が釧路市で収集した。煙草入れ、根付、緒締めは別物とみられ、後日合わせたのであろう。

8の煙草入れは、ニブフの製作である。アザラシの手首先端部を用いている。大きさは広げた状態で、幅9.4 cm・高さ14.2 cm・厚さ4.0 cmである。先端部から4.7 cmのところには煙草入れと紐で結び合わせる幅0.7 cmの穴がある。内面は黒サージが用いられ、動物(トナカイ?)の腱糸で縫い合わせている。煙草入れの口は皮紐で閉じるようになっている。

煙管入れもアザラシの皮製である。二つに折りたたんで縫い合わせ袋状になっている。長さ19.1 cm・幅3.4 cm・厚さ1.5 cmである。緒締めとしてガラス玉が2個付けられている。1個は青色で径1.8×1.4 cm、他の1個は透明で1.1×0.7 cmである。

昭和14年、片岡新助氏が釧路市で収集した。

9の煙管はノリウツギの枝分かれした部分を利用して作られており、色調は黒色である。長さ17.9 cm、羅宇は上下から斜めに切断されており、本来はより長かったとみられる。羅宇の径0.9 cm、火皿の径3.6×3.2 cm・内径1.7×1.1 cmである。短くなった吸い口の背面に刻み目が1つある。

昭和9年頃、弟子屈町屈斜路コタンの倒壊した住居で

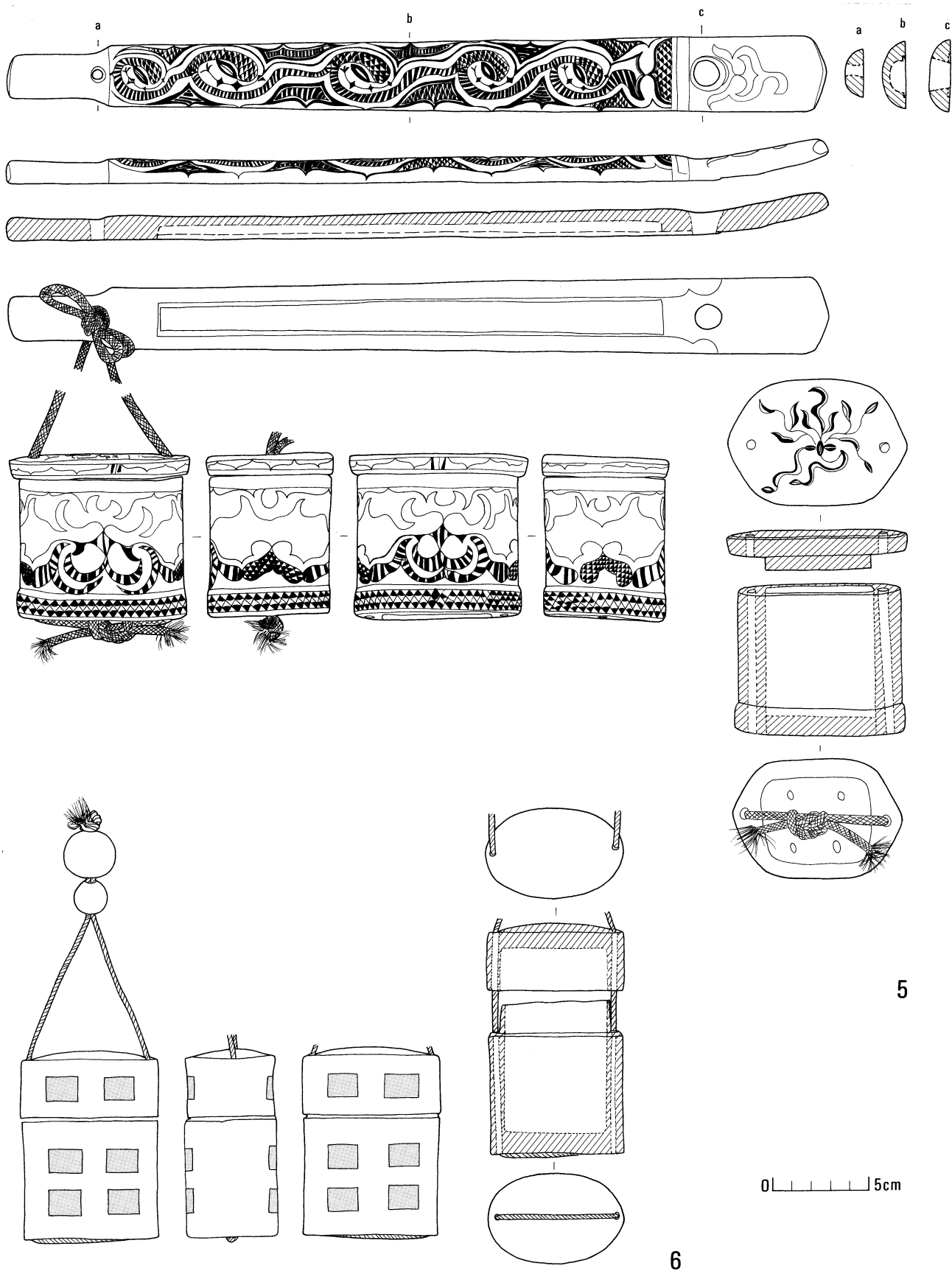
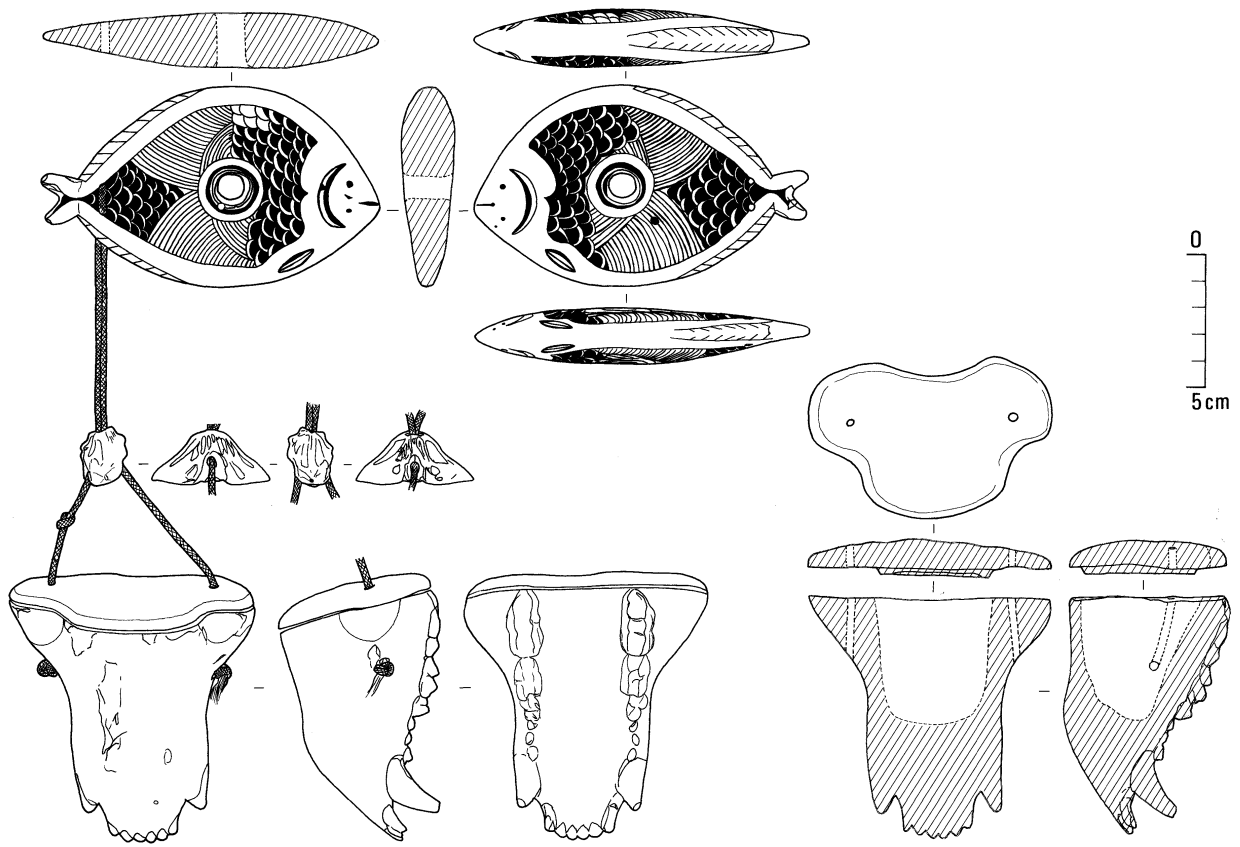
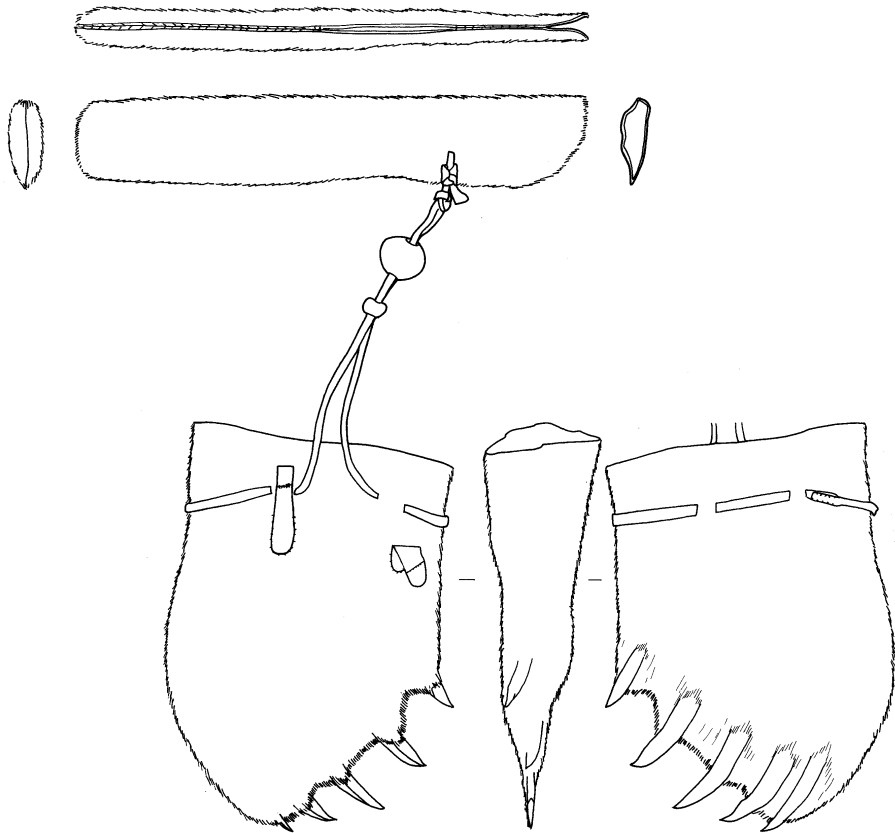


図3 煙草入れ5、6



7



8

図4 煙草入れ7、8

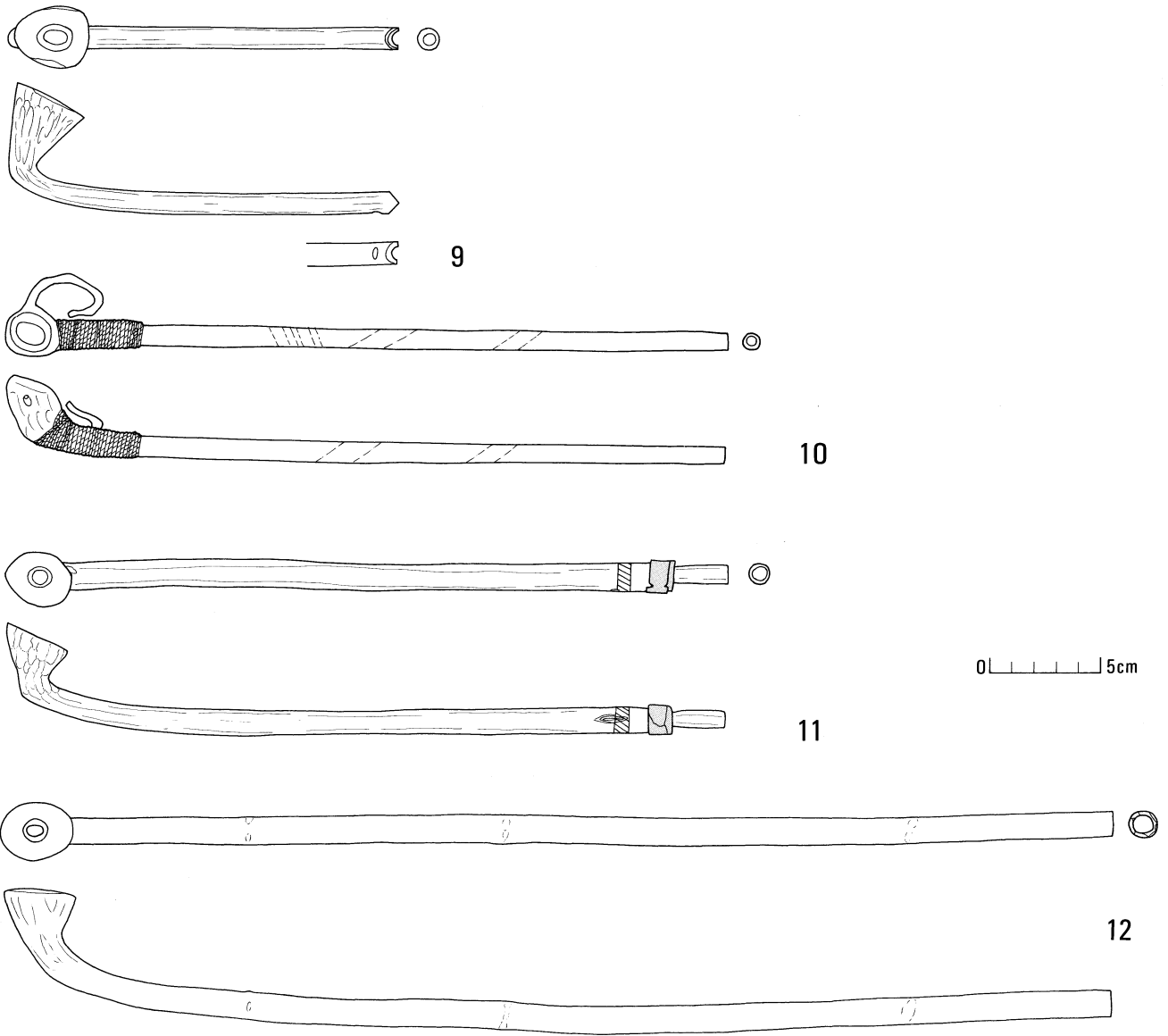


図5 煙管

更科源藏氏が発見した資料である。

10の煙管はノリウツギの枝分かれした部分が利用されている。雁首は少々削って和紙を巻き、木綿糸で縛ったあと松脂を塗っている。羅字は木皮を巻きすすけてから木皮を取り除いて濃淡を文様としている。長さ32.6cm、羅字の径0.9cmである。火皿の径2.0×1.9cm・内径1.4×1.2cm、火皿から長さ約8cm・径0.4cmの湾曲した小枝が伸びている。小枝は意図的に曲げられたのであろう。

佐藤直太郎氏が収集した資料であるが、収集地・収集年月日は不明である。

11の煙管もノリウツギの枝分かれした部分が利用されている。長さ32.4cm、羅字の径1.2cm、火皿の径3.0×2.4cm・内径1.2×1.1cmである。吸い口は別途差し込み羅字の端部を桜皮で巻いている。吸い口の長さ2.3

cm・径0.8cmである。羅字の端部から2cmのところ爵士彫の刻み目が施されている。

吉田為造氏が釧路市で、昭和11年以前に収集された資料である。

12の煙管はノリウツギの枝分かれした部分が利用されている。長さ49.8cm、羅字の径1.2cm、火皿の径3.2×2.7cm・内径1.1×0.9cmである。雁首は削った後に墨を塗っている。

昭和27年、厚岸郡太田村（現厚岸町）土生良吉氏により収集された資料である。

III

紹介した煙草入れや煙管は、片岡新助氏や佐藤直太郎氏などにより昭和10～20年代頃に収集されている。収集地は釧路市やその周辺であるが、古物商からも購入

していたとみられ、地域や年代を特定することは困難であった(出利葉 2001)。1～5・9～12はアイヌの自製品、6・7は和人、8はニブフによる。1・3～5の煙草入れや煙管差には、括弧文やうろこ彫り・すじ彫りなどアイヌ文様の彫刻が施されている。製作地は明らかでないが、彫刻文や印などから1と5は旭川地方であろう。4は日高地方の模倣品か。

全体に保存状態が良好で、製作年代はそれほど遡らないと考えられる。林善茂氏はアイヌ自製の煙管や煙草入れは明治時代から大正末年頃まで使用されていたという(林 1970)。特定できないが、この最終末頃に用いられていた喫煙具であろう。アイヌ期の遺跡から木製の煙管や煙草入れは出土していないようだ。自製品はイタヤカエデ材やナラ材が用いられ、和人やニブフによる煙草入れは真鍮製板、クマの上顎骨、アザラシの手首先端部などが用いられ材料が異なる。

自製品の煙草入れ1・3・4は胴部がくびれた形、2・5は印籠形である。胴部がくびれ、紐通しのところが突出する形の煙草入れは山丹地方、印籠形は本州からの影響が考えられている(杉山 1942)。形状で1と4には側縁部近くで縦方向に削り窪ませている。紐通しのところが突出する形の名残であろうか。

1の内部は長方形にくり抜かれ、2～5は長方形や楕円形にくり抜き貫通させ、底板を別に作って詰め込んでいる。従って、1は蓋と本体の二つの部品からなり、2～5は蓋・本体・底の三つの部品からなる。蓋と本体の合わせ方は1～4の4点の蓋が凹状、5が反対の凸状となっている。構造については、『アイヌ芸術』で日高アイヌや樺太アイヌの煙草入れが紹介されている(杉山 1942)。日高アイヌの煙草入れは蓋・枠・身・底縁・底填板の五つの部品、樺太アイヌの煙草入れは蓋・身・底の三つの部品からなる。戸部氏報告資料では、上蓋・頸部枠・胴部・脚部枠・底蓋の五つの部品からなり(戸部

1999)、日高アイヌと同じである。美幌町博物館の資料は、蓋・枠・身・底の四つの部品からなる(美幌町博物館 1989)。萱野氏の報告されている煙草入れは、蓋・本体・底の三つの部品からなり、本体に凸状の底板を合わせる作りになっている。そして、古い物ほど別底になるという(萱野 1978)。図示した自製品の煙草入れ1～5は、胴部が縊れた形や印籠形などの形状は類似しているが、二つあるいは三つの部品で構成されている。地域や時間差によるのでであろうか。

緒締めは、ガラス玉、鹿角分岐部、菱の実の殻などが用いられている。ガラス玉や鹿角分岐部は類例も多いが(杉山 1942、佐々木 1992)、菱の実の殻は管見にして例を知らない。和人製作の煙草入れのため異なるのであろう。

煙管差は1と5の裏面にヤニを取る用具入れがあるが、2・3には設けられておらず、4は意図を理解できなかったと思われる窪みがある。1の煙管差の用具入れは、

スライド式の蓋が装着されていたが、用具は入っていない。なお、『アイヌ芸術』第2巻木工篇では、日高地方の煙管差の裏面に食事用の箸入れとなっている例が掲載されている(杉山 1942 図版47-9)。

煙管はノリウツギを材料としている点は共通するが、形状は10の雁首や11の吸口などに変化がみられる。これとは別に、萱野茂氏によってやや異なる煙管が紹介されている。「釧路の鶴居村に住んでおられた八重九郎さん宅に二本の吸い口のあるニキセリがありました。熊神にたばこをすわせる一種の縁起もののきせるで、さびたの木にたまたま二本の吸い口をつけることができるように枝が生えているものがあるのを八重さんのお兄さんが、山を歩いていたときに見つけて、作られたのだということです。人間と熊とが仲良く一本のきせるでたばこをすい分けるといことなのか、などと勝手に想像しながら見せてもらったことでした。」(萱野 1978)。釧路に関する記載なので引用した。釧路市立博物館収蔵資料には見当たらないが、知里真志保氏による『分類アイヌ語辞典(第一巻植物編)』の中で十勝足寄の「カモイ・キセリ」とされるような煙管であろう(知里 1953)。市立旭川郷土博物館所蔵品目録(北海道教育委員会 1977)にある。

北方地域の煙管については、宇田川洋氏により周辺民族資料や形態分類、喫煙儀礼、交易など多岐に渡って論考されている(宇田川 1991)。ここに紹介した煙管は、民族資料の中の、木製、W3とされるタイプの範疇であろう。木製の煙管は民族資料での確認にとどまるようである。

釧路周辺の遺跡から出土している煙管は表の通りである。弟子屈町矢沢遺跡(澤・松田 1977、澤 1978)では真鍮製の雁首2点と吸口1点の計3点、釧路町遠矢第2チャシ跡(福田 1975)では真鍮製の雁首2点と吸口2点の計4点、阿寒町下仁々志別堅穴群(西・松田 1983)では真鍮製の雁首1点、阿寒町シュクシタカラ遺跡(澤 1963)では真鍮製の雁首1点と吸口1点の計2点、釧路市幣舞遺跡(石川 1996)では真鍮製の雁首3点と吸口7点の計10点、厚岸町史跡国泰寺跡(熊崎 2000)では銅製の雁首1点と吸口1点の計2点が出土している。発掘調査による出土品は金属製の雁首や吸口などに限られることが多く、羅宇は金属部分に付着して一部残されていることもあるがほとんど失われている。金属製の煙管は、本州からの移入品であろう。煙草入れは出土していない。

東京都一橋高校地点出土の煙管について6段階に分類され(古泉 1983)、年代観が与えられている(宇田川 1996)。参考にすると、弟子屈町矢沢遺跡の煙管は17世紀後半、釧路町遠矢第2チャシ跡は18世紀後半、阿寒町下仁々志別堅穴群は19世紀以降、阿寒町シュクシタカラ遺跡は17世紀後半、釧路市幣舞遺跡と厚岸町史跡国泰寺跡は19世紀頃である。釧路町遠矢第2チャ

表 釧路の煙管出土遺跡

遺 跡 名	雁首	羅字	吸口	材料	年 代					備 考
					16	17	18	19	20	
弟子屈町矢沢遺跡	2		1	真鍮		↔				チャシ跡は17世紀前半
釧路町遠矢第2チャシ跡	2		2	真鍮			↔			チャシ跡は16世紀中葉
阿寒町下仁々志別堅穴群	1			真鍮				↔		
阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡	1		1	真鍮		↔				
釧路市幣舞遺跡	3		7	真鍮				↔		
史跡国泰寺跡	1		1	銅				↔		

シ跡は16世紀中葉頃、弟子屈町矢沢遺跡は17世紀前半の構築とされている。釧路町遠矢第2チャシ跡の煙管はいずれも第I層出土でチャシ使用時期の所産ではないようだ。断片的であるが、この地域においても17世紀から19世紀にかけて煙管が出土している。

遺跡から出土した煙管は金属製であり、自製品の木製煙草入れや煙管は出土例がない。紹介した喫煙具は明治時代以降と考えられ、遺跡出土例との関連性を求めることはできないが、この地域でも17世紀頃から喫煙の風習が伝播していたことは明らかである。

参考文献

石川 朗 1996 釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター 170

宇田川 洋 1991 北方地域の煙管と喫煙儀礼 東京大学文学部考古学研究紀要 第10号 51-101

宇田川 洋 1996 北方地域の煙管—考古資料から考える— 第11回特別展 たばこと民族文化 北海道立北方民族博物館 12-16

大塚 和義 1993 アイヌの煙草入れ 表紙写真の説明 月刊みんぱく第17巻6号 国立民族学博物館 財団法人千里文化財団

萱野 茂 1978 アイヌの民具 すずさわ書店 246・247

北構 保男 1983 1643年アイヌ社会探訪記—フリース船隊航海記録— 雄山閣 40・43・74

熊崎 農夫博 2000 史跡国泰寺跡Ⅲ 9・13

古泉 弘 1983 江戸を掘る 柏書房 117～128

佐々木 利和 1992 東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料編 159-164

澤 四郎 1963 北海道阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡発掘報告 阿寒町の文化財先史文化篇第一輯 阿寒町教育委員会 30

澤 四郎・松田 猛 1977 弟子屈町矢沢遺跡調査報告書—第1次調査— 弟子屈町教育委員会 61・66

澤 四郎 1978 弟子屈町矢沢遺跡調査報告書—第2次調査— 弟子屈町教育委員会 35

杉山 寿栄男 1942 アイヌ芸術 第二巻 木工篇 北海道出版企画センター 1973 復刻 36-38、62

知里 真志保 1953 「分類アイヌ語辞典（第一巻植物篇）」日本常民文化研究所、知里真志保著作集 別巻I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編 平凡社 36・130

鶴丸 俊明 1989 北海道平取町イルエカシ遺跡 平取町遺跡調査会

出利葉 浩司 2001 博物館が語るアイヌの生活用具 白い国の詩 東北電力株式会社 6

戸部 千春 1999 アイヌ民族の煙草容器分析 北国研究収録第3号 名寄市北国博物館 45-62

西 幸隆・松田 猛 1983 北海道阿寒町下仁々志別堅穴群 阿寒町教育委員会 23

馬場 脩 1942 日本北端地域のアイヌと煙草 古代文化13-11、「樺太・千島考古・民族誌1」北海道出版企画センター 135-147

林 善茂 1970 食料 九煙草類 アイヌ民族誌 第一法規出版株式会社 421

半田 昌之 1996 たばこ その歴史と文化 第11回特別展 たばこと民族文化 北海道立北方民族博物館 6-11

美幌町博物館 1989 美幌町博物館収蔵目録 第1集 36

福田 友之編 1975 遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書 北海道教育委員会 51・52・56

北海道教育委員会 1977 市立旭川郷土博物館所蔵品目録 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有形民俗文化財1） 39

北海道教育委員会 1979 釧路市立博物館所蔵品目録 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有形民俗文化財3） 170・171

松崎 水穂 2001 混在する和人・アイヌの世界 よみがえる北の中・近世 掘り出されたアイヌ文化 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 75

渡辺 裕 1996 北方諸地域におけるたばこ文化 第11回特別展 たばこと民族文化 北海道立北方民族博物館 54-59

渡辺 実 2007 日本食生活史 吉川弘文館 171-173

吉田 巖 1989 北海道あいぬ方言語彙集成 小学館 123